

とき・平成30年5月20日

場所・益田市グラントワ 中ホール

主催・ますだ演劇祭実行委員会

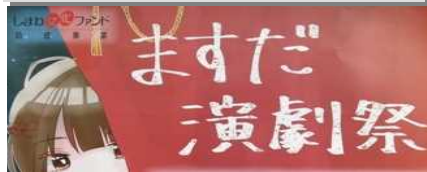
共催・公益財団法人しまね文化財団（いわみ芸術劇場）

公益財団法人浜田市教育文化事業団（石中央文化ホール）

助成・しまね文化ファンド ごうぎん島根文化振興財団

ますだ演劇祭観劇記

洲浜昌三



- ① 浜田高校演劇部 「渡る異界はクスばかり」 作・ピクト
- ② 石見国くにびき十八座 「この道をつないで」 作・金田サダ子
- ③ 明誠高校演劇部 「七人の部長」 作・越智優 潤色・渡辺聖梨
演出・熊谷莉緒 渡辺聖梨
- ④ 劇団ハタチ族 「跳べ、守護神！」 作・土橋淳志 演出・西藤将人
- ⑤ 市民演劇集団 「ドリームカンパニー」 「私の黄色いハンカチ」
作・大畑喜彦

はじめに 創作と批評は車の両輪

現在は、批評が低調な時代です。

「趣味でやっているのに、なんで文句を言われにやいけんのですか」

「なんで頑張ってるのに、なんで文句を言われにやいけんのですか」

「なんでも頑張ってるのに、なんで文句を言われにやいけんのですか」
「ほめ言葉は素直に聞くけど、批評には嫌悪感を示す。今は「お互いに優しい時代」です。確かに教育でも子育てでも、ほめ言葉の方が心地よく効果的なのは確かです。厳しい言葉は瞬間的に反発を招きます。演劇大会の幕間討論で、こんな経験があります。」

「今度の脚本を洲浜は怠けて書いた。自転車で富士山に登る苦しみをしていない」。冒頭で講師だった国立劇場の舞台監督から、指摘された時はショックでした。「良薬は口に苦し」です。

創作と批評は文学芸術の車の両輪です。劇評で出会った数々の言葉の中には、ダイアモンドのような輝きがあり、今でも指針です。

「芸術は説明ではない」「劇とは激、対立である」「演劇は観客の想像力に委ねる部分が多い表現形態である」「優れた舞台はすべてリアリティを持っている」「評価は観客にある」等々。当たり前ですが、背後に深い世界があります。暗く長い試行錯誤があり出会えた言葉の光です。

実行委員の村上ハナモト彩音さんから、劇評を頼まれた時、こんな言葉がありました。「誉め合いや、ただのイベントで満足するのではなく、劇評を受けて自分たちの劇をもっと向上していきたい、という意見が会議で多数でした」

熱意と真摯な言葉を受けて、「お役に立てば幸せスピリット」で、駄馬に鞭打ち、「観劇記」として書くことにしました。観客が百人いれば、百とおりの受け止め方があります。この観劇記もその一つだと思って読んでください。文中で使用した写真は実行委員会から提供されたものです。

(20180608 洲浜)

① 浜田高校演劇部

「渡る異界はクズばかり」ピクト作

脚本選択と演出の重要性

脚本は命 音楽には曲、演劇には脚本が命です。劇の良し悪しは、80%脚本で決まる、と言った演劇人もいます。魅力のない曲を演奏や歌唱力でヒットさせるためには、飛びぬけた才能が必要です。同様に、魅力のない脚本を感動的な舞台に創り上げるためには、ずば抜けた演出力、演技力が必要です。

脚本選択には誰も苦勞します。既成の脚本は著作権の関係上、許可なく、修正や削除、追加はできません。(脚本家により対応には差がありますが)。

そこで、劇団内で創作するのがベストです。大変ですが、ああだ、こうだ、と言いきりながら、自由にみんなのアイデアを出し合い、セリフを変更したり、修正、追加して、より納得できるものに仕上げていけるからです。

脚本担当者や演出家(アマチュア劇団では両方兼ねている場合が多い)は、中心になって、みんなのアイデアをまとめていけばいいのです。力量のある演出家がいる場合は別ですが、そうでないアマチュア劇団では、この「意見を出し合い演出が決定」方式が効果的だと思います。

脚本「渡る異界はクズばかり」について この劇は、少し観ただけで、インターネットからダウンロードした脚本だとわかります。高校



演劇大会でも時々出てきますが、ネット脚本には一つのパターンがあります。

ライトノベルやマンガの影響を受け、奇抜な場面や人物を設定し、言葉遊びやギャグでスピーディに短い会話で展開する。言葉で笑わせ、楽しませて、最後にびっくりするような展開(仕掛け)にもっていくことに主眼があり、じっくり人間や社会を描いた作品は少なく、人物の扱いが類型的で描き方が浅い。

奇想天外なフィクション(「嘘」)で観客を楽しませ、最後に「真」を舞台に現出して観客に感動を与えれば、正に演劇の真骨頂です。「嘘から出た真」は演劇の本質を示した言葉ともいえます。しかし、簡単なことではありません。演出力と役者の表現力が必要です。

さて、今回の舞台はどうだったでしょうか。観客に、ストーリーリイは分かったでしょうか。言葉遊びで何度も笑い、最後のどんでん返しに驚き、心を揺す振られたでしょうか。

あらすじ 失恋し自暴自棄になって酒を飲んでいる主人公の愛花が突然、異界へ転生します。そこには6500歳で自己中心的な姫や、だらしない賢者、厳しいメイドのりり、姿は大人で3か月前に生まれたナナがいます。みな奇妙な人物です。ギャグや言葉遊びの会話が延々と続きます。この場面では、ストーリーリイの展開がほとんどないので、会話で興味をひき、笑わせないと退屈します。異世界を楽しもうとする愛花を賢者は拒み、地上へ帰そうとします。その理由は最後に分かります。賢者も地上で失恋し異世界へ転生したのですが、愛花は賢者の恋人の娘だったので。女の子が生まれたら、アイカと名前を付ける予定でした。

ストーリーリイが十分理解できず、すっきりしなかったお客さんもあったのではないのでしょうか。アンケートでは「とてもいい劇だった」「楽し

く鑑賞した」などと同時に、「セリフが聞き取りづらかった」「脚本を考えた方がいい」などの書き込みもありました。推測ですが練習時間が十分取れなかったのではないかと思います。

高校の演劇部は、十月の大会を目指して劇を作るのが一般的です。試験や行事で忙しいので、五月に新作を上演するのは大変です。短期間でしつかりセリフを覚え、スピーディな会話で劇を運んだのはよかったです。思いますが、脚本を舞台でどのように具体的に表現していくかという演出が不十分で、劇にメリハリがなくフラットに流れていった印象を受けました。

脚本を具体的に見せる工夫 奇妙な人物と奇妙な世界ですから、それを衣装や小道具、話し方、身振り、癖、特徴などを生かして、しつかりお客さんに印象付けないと、人物や劇が平板になり印象が薄くなります。主人公が学校のトレパンで酒を飲んでると高校生が飲んでるかのようで、違和感があります。見ただけで、どんな人物か想像できないと、セリフだけでは、すぐに分からないことがあります。衣装や小道具は重要です。

異界は、地上の世界と違うことを明確に印象付ける必要があります。今回の装置は、舞台に三段の移動式階段と、黒い木の箱三個、クマやタヌキのぬいぐるみを置いていましたが、これでは普通の地上の世界です。奇妙な異界を感じさせる照明や奇妙な装置が必要です。適切な装置や衣装は、それ自体で劇のテーマや人物を象徴し、演技を引き立て、劇の理解を深め、テーマも深めます。

作るのが大変なら、シートや古いカーテンなどを平台や箱足にかぶせて色々な照明を当てれば、不思議な世界が出現します。こうアイデアは演出の仕事です。演出がいなければ（パンフレットには書いてない）みんなアイデアを出し合う必要があります。

「時間も金もないので、タダでカンタンに異界を表現するいいアイデア出してよ」と言って、ワイワイ、ガヤガヤすれば、柔軟な思考の若者には、必ずグッドアイデアが出てきます。これは練習を始める前の脚本分析の段階で実行すべきことです。注

笑いを狙った会話ではポイントになる言葉(キーワード)を立てる工夫が必要です。劇のテーマが頭を出す重要な場面では、それを引き立てる工夫が必要ですが、この劇ではピアノ曲を流して効果をあげたと思います。舞台の空気が変わり、賢者の心情が伝わってきました。

メモから断片的な感想

・幕開きで愛花が、緞帳前のスポットで、折って重ねた毛布の上に座ってポトルを持って飲んでるが、どんな場面なのか、すぐには分からない。失職し失恋してヤケクソになっていることをお客さんにしつかり印象付けておくことが、それ以降の劇の展開や人間関係に重要になってくる。思い切って演じたい。

・異界へ入っていくとの不安や驚きの表現がもっとほしい。
・会話が、舞台上の二人の間だけで交わされると、劇が二人だけの狭い世界に収まってしまふ。二人で会話していても、客席の後ろのお客さんに届けることを意識してしゃべらないと、どんな気持ちでしゃべっているのか人物の心情が伝わってこないし、劇が広がらない。

・音響では、ピアノ曲をうまく使っていて、その場の雰囲気がよく出ていた。特にラストに近い場面で、賢者が愛花のことを「生きていたらいいことがある」という場面は効果的だった。

注 「言葉を立てる」セリフには必ず相手に伝えたいキーワードがあり、その言葉を立てる微妙な方法はいろいろあります。朗読では特に重要。訓練してほしい。

② 石見くにびき18座

「この道をつないで」 創作・金田サダ子

上演回数を重ね、まとまった詩的な舞台

劇を観ながら、「ポエティックな舞台」、と何度も思いました。旧満州からの引揚げ、という過酷な歴史的事実を、リアルに再現するのではなく、場面を次々と切り替えながら、省略の多い象徴的で端的な会話で、展開し、観客に想像する余地を大幅にゆだねる手法だからです。高齢者ということを考慮して、作者が、動きの少ない朗読形式、構成劇形式で脚本を書かれたからでしょう。劇としては、弱点を抱えた劇、と言えますが、意図や制作目的が明確にあつての上での創作ですから、その観点に立つて考えないと、「塩は辛いからダメ」式、批評になります。

平均76、最高90歳、健康維持を目標に結成された劇団―ということを考えれば、とてもよくできた脚本ですし、それを舞台化した素晴らしい劇でした。

さらに感心したのは台本です。会話だけ載せた台本が普通ですが、この19ページに渡る台本には、照明、音響、配役、会話、立ち位置図などがとても分かりやすく書かれています。キャストやスタッフに細かい配慮をした台本です。こんな台本は初めて見ました。劇が未完成状態だ



つたら、できないことです。普通、創作台本は、練習しながら、修正、削除、追加、変更の繰り返りで完成していくからです。

明確なテーマと感動 これまでに「石見くにびき18座」の創作劇は3本観ました。「花子がやってきた」、「くすの葉風」、今回の「この道をつないで」。

それぞれ過去の舞台風景が、絵としてくつきりと浮かんできます。

それは、戦争と平和という普遍的なテーマで、その時代の象徴的な出来事を取り上げて、簡潔な表現で舞台化しているので、伝えたいことが明確に伝わってくるからです

「この道をつないで」は、石見演劇フェスティバルで、2度観たので今回3度目です。

最初の舞台では、いい劇だと思いながら、キャストの発声や動きにかなり差があり、演出の金田さんの苦勞に同情しました。平均年齢70歳以上、最高80歳後半、と聞けば、「しょうがないだろうな」と納得したものです。

2度目には、金田さんは、無理をせず年齢や個性に応じて、うまくセリフや動きを、その人に合わせて表現するように演出し、工夫しておられました。しかし、努力中という痕跡が見えました。

今回の舞台では、先ず発声や活舌、声の大きさなどに大きな個人差がなく、とても自然で、言葉もよく分かり、感心しました。落ち着いて、丁寧には、はつきり、言葉をしゃべっておられました。

現代劇では会話は、昔の2倍、3倍のスピードで機関銃の如くしゃべりまくるのが一般的です。時代感覚の反映です。今、小津安二郎の映画を見れば、まどろっこしくてイライラする若者が多いでしょう。今回の演劇祭では、浜田高校、明誠高校、西藤将人さんの一人芝居のセリフの

スピードと比べてみるとはつきりします。しかし速くしゃべればいい、という問題ではありません。

全国大会出場で2度受賞の実績 今回の劇の発声や表現の進歩の原因はなんだろう、と考えました。

1週間に1回集まって、発声、歌、体操を重ねていること。何よりも、全国シニア演劇大会に出場し、仙台では、高校生が選ぶ「シニア演劇賞」、福岡大会では「観客賞」受賞―それに至る練習量があったから安定した力量が身についたのでしよう。

高校演劇部の場合は、実力がついても卒業していくので、2、3年毎に振り出しに戻り、継続が困難なことも多いのですが、そういう断絶や出入りがなく、一貫して一つの劇を継続できたのも大きいと思います。さらに、練習では、お互いに、率直に意見を出し合って喧々諤々と厳しいやり取りをするとか。経験豊かな高齢者の知恵が集まれば、納得のいく表現が生まれることでしょう。

メモから断片的な感想

・タイトル「この道をつなぐ」が暗示性、象徴性がありいい題。旧満州から「日本へ無事に帰る道」、戦争を経験した高齢者の体験や平和への思いを「若者たちへつなぐ道」、「侵略された中国と侵略した日本をつなぐ道」。いい題はテーマを象徴し想像を広げ、心に刻まれる。

・音響で音楽がたくさん使われたが、効果的だった。ほとんどの場面が装置がない素舞台が多いので、照明や音響は大切な役割を果たす。

・衣装も当時の物に近いように工夫して作られている。
・開拓地での仕事で、高齢者が子供たちを演じるがには、少し無理があるが、大きな違和感がないように、衣装や帽子、動きなど頑張っている。
・子供が老人を演じることはよくあるが、高齢者が子供を演じるのはあま

り見たことがなく、とても難しい。挑戦に拍手！

・歩けなくなった叔父さんを満州の地に置き去りにする場面では、もつと工夫がほしい。さらつとし過ぎ。

・全員全滅した部隊の村を通る場面で、全滅した場所を舞台中央に想定して演じたが、ホリゾントの方角か、客席の前方に想定した方がいい。

・中国人の風格があった。冒頭に中国語をしゃべって、その後は日本語でしゃべるのは、とてもいいアイデアだと感心した。

・ほとんどセリフはついていないで、ゆっくり、はつきり喋られるので、安心して聞いておられる。飛び切り声がよく通り、活舌のいい女性が2人。合唱でもやっておられたのだろうか。歌もステキ。

・4人が台本を持って朗読された場面、台本を見ずに語る人とそうでない人があり、アンバランス。統一したほうがいい。

・陰アナウンスでの解説は手短で効果的だった。
・日本へ帰ってからの活動は、ちよつとごちゃごちゃしていて、分かりにくいところもあった。中国語教室場面はもつとすつきりしてもいい。

・楽しませようという意図が見えるが、前半の場面と比べれば、軽い。きいこが中国に残る、という場面、なぜ残るのかわからない、という若い人がいた。動機をもつと出した方がいいかもしれない。

・カズエと母が「夕焼け小焼け」を歌い、中国にいる、きいこが歌に加わる場面は素敵！きいこに中国語で歌わせたい！そして、2番は3人で歌わせたい！テーマも感動も一気に深まり伝わる。こういう場面を作れるかどうかがとても重要。説明なしに場面に語らせる。最高。ここで終わっても十分感動が伝わる。あとはちよつと追加的な印象。

・アンケートでも、「感動した」「活説がよかった」「平均年齢に驚いた」「涙があふれて止まらなかった」「子供に見せたい作品である」等々、とても好評だったことが分かります。

③ 明誠高校演劇部

「七人の部長」作・越智優 潤色・渡辺聖梨

演出・熊谷莉緒

脚本分析、演出が生きた舞台

日頃の練習の成果がうかがえる、いい舞台でした。テンポの速い会話で生き生きと自然な高校生を演じ、最後まで安心して観ておれました。

脚本をよく理解し、演出の力が行き届いているので、無駄や自分勝手な表現がなく、それぞれの人物の特徴を活かして展開し、ラストの場面では、報われることがなかった部長たちや生徒会長の夢や苦労や哀感がしんみりと伝わってきました。アンケートでも、「最後のシーンは泣きそうになった」「生徒会長の最後のセリフが印象的だった」「最後はぐっと来るものがあった」などと好評で、劇の狙いが十分伝わったことを物語っています。

それは、何よりも脚本の力、演出の力、表現する力があるからです。

高校演劇やアマチュア演劇では、演出はプログラム用の「名ばかり」のことがよくあります。総合芸術（文学、美術、音楽、照明、衣装、舞台美術、言葉や身体表現、発声等々）

である演劇は、1、2年でマスターすることは不可能です。顧問に経験者があるかないかは大きな違いになります。特に脚本分析と舞台での表現の方法は重要な演出の役目です。初心者には、自分が演じている役



が、観客にどのように映っているか、十分わかりません。第三者の客観的な目が必要です。それは演出の役目です。

脚本について この脚本は平成13年に高校演劇全国大会で最優秀賞を受賞されました。当時早稲田大学生だった越智優さんが、愛媛県立川之江高校演劇部のために書き下ろされました。同じ作者の「夏芙蓉」と共によく上演される人気のある脚本です。

あらすじ 舞台は私立女子高校の生徒会室。生徒会長（手芸部部长）、書記の2人が、これから始まる部活動予算会議を準備して待機しています。剣道、演劇、アニメ、陸上、ソフトボール、文芸部の部長が集まってきました。

それぞれ特徴のある7人の部長です。陸上部部長は、速く終えて練習することだしか頭になく、イライラして発言します。演劇部は3千円の予算では活動できないと激しく抗議します。他の部長は、大した活動もしてないのだから仕方ない、と冷たい。話に話の尾がついて会議は脱線に脱線。激しい言い合いや口論、世間話。その中で、各部の苦労や困難が浮き彫りになります。

会議が終わって、演劇部部长は言います。「私、一度でもいいから舞台上に立ちたいと思って3年間演劇やってきたんです。でもだれも推薦してくれなかったから、いつも裏方の道具係り」。その道具の張りぼてを陸上部員があるとき邪魔だとけって破っていたのです。

剣道部の部長は退出するとき、「今度いつ公演するの？アタシ見に行くよ」といって練習に飛び出して行きます。残った会長は一人で部屋の整理をします。会長も3年間、学校で事前に決められた予算を形式的に承認してもらうことだけが仕事でした。一度でもそれをひっくり返してみたいと思って今回は会議を進めたところでした。誰もいない部屋に壊れた窓から風が吹いて、書

類が一枚、床に落ちます。

前半では個性を生かしてスピーディに会話を展開しないと退屈な劇になります。前半を平板に進めると、ラストのしんみりとした哀感が伝わってきません。その点ではよく役目を生かして演じていました。

特に剣道部の部長は、単純で、テキパキとして、やや投げやりで、行動的な部長を生き生きと演じていました。控えめで大人しそうな、声にあまり力がない生徒会長は、はじめは物足りなかつたのですが、ラストの場面になると、それがかえって生きてきました。(気弱そうなのに、3年間、改革したいと考えて反抗心を持ちながら会長を務めてきたのか)そういう女子高校生の切ない気持ち、心を打ちました。

演劇部部长、アニメ部長など、それぞれ実在感がありました。舞台上、力まず伸び伸びと演じることは、簡単なようでとても難しいことです。力んで発声し、力んで演じると、観客も無意識で緊張して受け取り疲れます。伸び伸びとした演技は、空気のように抵抗なく観客の心に入っていきます。

メモより断片的な感想

- ・椅子に座って会話中心の単調な劇にならないように、立ち上がったり、前へ出てきたり、詰め寄ったりして動きがあるので、劇の流れに変化が生まれる。対立するところはもっと激しく対立してもいい。
- ・舞台装置は、長机と椅子、黒板。配置や向きをよく考え、観客へ顔が見える配慮がしてある。
- ・会話のテンポやスピードは自然でいいが、人によって活舌が不十分なところもあり、言葉が明確に伝わらない時もあった。
- ・生徒会長は、無駄口が延々と続く会話を、なぜ厳しく規制しないのか。

観客は、頼りない生徒会長だな、という印象を持つ。しかし、そこには隠された意図があつたのだ。その点で、ちよつとでもその意図を伺わせる瞬間があつてもよかつたのではないか。それはラストに関わる重要な布石。ちよつとした布石が後半の場面で生きてくる。それはドラマ作りの基本。キャストはそれを理解して演じる必要がある。



グラントワ中ホールの照明を点検するスタッフ

まずだ演劇祭 実行委員会

- 委員長—末成弘明 副委員長—内藤みどり
- 副委員長—杉内博志
- 委員—金田サダ子 山本紀子 篠田一義
- 澄川雅是 石川和浩 岡田正
- 事務局—永田賢治 澄川雄二 榎原育美
- 村上彩音

幕間の司会—榎原さん、ポイントを押さえて劇団の紹介、感想、質問など、いい雰囲気であまく進められました。

高校演劇部が社会人の演劇祭に参加することは従来考えられませんでした。学校行事との関係や部活動は教育の一環だということ、演目が一般向けでなく面白くないこと、などがありました。しかし素晴らしい劇を上演する学校もあり、今回のように参加されることはお互いの刺激と勉強になり、すばらしい地域貢献です。

筆者は、邑南町田所生まれ、昭和40年早稲田大卒業後、新設2年目の旧県立益田工業高校へ赴任、柿本神社で縁結び、益田は懐かしい町です。転任後は遡摩、川本、大田で演劇顧問30年、創作脚本本長短約40数本。高校演劇島根、広島、全国大会の講師など。大田市演劇サークル劇研「空」代表、日本詩人クラブ、日本劇作家協会会員、石見詩人同人、島根詩人連合理事長、脚本集、詩集など

9月14、劇研「空」主催で、第9回朗読を楽しむを大田で開催予定。



劇研「空」主催、第2回朗読を楽しむの朗読者木炭を詩筆する

④ 劇団ハタチ族

「跳べ、守護神」

作・土橋淳志

演出・西藤将人

内なるパワーで形を破る

雲南市で活発な演劇活動が続いている西藤将人さんを、実行委員会が特別ゲストとして招待した一人芝居です。とてもエネルギーが豊富な一人舞台で観客は圧倒されたことでしょう。終演後に楽屋近くの廊下で、「おつかれさまでした」とあいさつしたら、「もう少しで酸欠になるところでした」とのこと。さもありなん。

サッカーのゴールキーパーを演じた一人舞台ですが、何度も限界まで声を張り上げ動き回る場面がありました。訓練されているので、猛烈に速いセリフでも、発声や活舌がよく、言葉もよくわかりました。試合の展開に応じて、いろいろな表情で観客に向かって喋り、観客は目の前で観戦しているような臨場感がありました。

「劇は激だ」という言葉があります。

形を演じるのではなく、その形を破って、

新たなイメージを舞台に現出できれば最高です。老人を演じる時、老人らしく演じるのは最低の条件ですが、老人らしい形を演じるのが目的ではなく、一般的な老人像（形）を破って、その台本が目指すテーマを発展させるような老人像を舞台に創造することです。そこに真似ごとではないオリジナリティ、ある種の普遍性が生まれ質の高い感動を与えます。

そういう観点からも、刺激になり、参考になる舞台だったと思います。



一人芝居ですが、セリフは単純ではなく、多様です。独白や回想、実況中継、場面描写、ト書きに近いセリフなどの他に、おじさんとの会話、外国人選手の声、子供たちとの会話等々、複雑です。この様々なセリフを、どのように表現するかそれが楽しみの一つでしたが、自然で違和感がなく、表現力に感心しました。

ストーリーを単純に紹介。藤川淳之介が公園でランニング中、おじさんから話しかけられ、派手な色のキーパーグローブを渡されます。おじさんの質問に答えて、一年前の試合を振り返ります。劇は再現される試合の場面を中心に展開されます。小柄な藤川は第三キーパー

で、そのうち首になる運命。ある試合で、第一、第二キーパーが怪我や違反で退場になり、予期しないキーパーを命じられ、元日本代表の名キッカー高原のキックを受けることとなります。見事にボールを跳ね返し勝利。興奮してなだれ込んできたサポーターに胴上げされ、落とされ、鎖骨骨折。語り終えると、おじさんは名刺を差し出します。「出雲」強化部長」と書いてあります。8 - 勧誘です。藤川は、「いつか来るその日のために」準備はできていました。

メモから断片的な感想 ・ 起承転結がある台本だが、ラストではうまくまとまりすぎて作意が見え世界が小さくなった。・ 地域性を出して「出雲FC」とした意図は理解できるが、この劇ではイメージを矮小化しない方がいい。・ 下手なキーパーだから、もつと笑うような息抜きがほしい。・ お互いに緊張のし過ぎ。8割のエネルギーで、10割の限界を感じさせる演出や演技はできないか。実演でない芸が生まれる。冒頭の照明で上下のUSは効果より逆効果。長い間、顔が見えないと集中できない。リハで照明係りとの連携が必要。演出演者一体では無理かもしれない。(お客様としてお招きした人へ勝手な批評厚顔無恥、乞御許)

⑤ 市民演劇集団「ドリームカンパニー」 「私の黄色いハンカチ」 作・大畑喜彦

心温まる懐かしい劇

ひと昔前の心温まる懐かしい劇を観た印象です。ストーリーも分かりやすく、それぞれの人物の個性がよく表現され、発声の言葉もていねいで声も通り、アンケートでは観客にも好評でした。「笑った。感動した」「思いが伝わってきて泣いた」などという反応や、地元劇団だけにエールを送る言葉もありました。

舞台装置を写真で紹介すれば説明抜きで一目で分かるのですが、残念ながらリハの写真しかありません。

緞帳が上がると、舞台上手にある映画館の入口の壁に貼ってあるポスターが浮かびあがります。これから始まる劇の「場」や内容を象徴的に見せるクレヴァーな手法に感心しました。劇の幕開きとラストは重要です。舞台の手側にはベンチ、頭上には数枚の黄色いハンカチが綱にぶら下がっています。何か起こりそうな舞台装置です。装置を、舞台を飾る単なる置物として作ると劇が薄っぺらになります。劇の展開や進行を助け、劇中で使用し、効果的に使うための空間を作り、同時にその装置そのものが劇のテーマを象徴しているーそんな装置が出来たら最高です。長短さまざまな脚本を



「私の黄色いハンカチ」本番の舞台とは全く違います。本番のいい写真がないとのことでした。ハルの写真を使用。演劇祭実行委員会提供

40本近く書いてきましたが、それを自由に料理する演出と舞台美術担当者がほしい！といつも思っていました。

あらすじ 小さな町に映画館があり、独り者の滝子が経営している。ミキは中学生。両親は離婚し、母はどこにいるか不明。父は飲んだくれて借金を抱え、暴力団にゆすられている。家庭崩壊状態でミキは、毎日映画館へきて、滝子や従業員と家族のように親しく過ごしている。

滝子はミキを我が子のように接し、養女にしたい。ある日、映画館へミキの母らしき人(玲子)が様子をうかがいに来る。ミキに声をかけたいが、拒否される不安も大きい。ある日、玲子は滝子に手紙をこつつける。そこには、「こんな母でも会ってもいいと思えば、黄色いハンカチをぶら下げてください」と書いてあった。ミキは滝子へ「会いたい」という。

使用人の老人、銀平が黄色いハンカチを準備して、吊り下げる。みんなでそれを見上げている。

脚本について 平成10年に「ドリームカンパニー」が結成（石見演劇フェスタのパンフ）され、創作劇を中心に着実な実績を積んでこられました。創作の大黒柱は大畑喜彦さんです。保存している新聞の切り抜きによれば、映画の台本や撮影などにも造詣と実績があり、一連の脚本にも狙いが明確で作劇術も豊富です。今までに実際に観た舞台は、生前葬りハーサル「花森商店おしまいの日」「ささやかなさよなら」などで、印象に残っています。

今回の劇も人間の「生きる哀しみ、喜び、希望」を暖かい眼差しで描こうとしたものです。それを観客に伝えるためにいろいろな工夫がしてあります。キャストは、その狙いを身体を通してよく伝えていたと思います。

冒頭で、「ひと昔前の心温まる」と書きました。現在では小さな町には先ずない映画館が舞台ですから、昭和30〜40年代でしょう。それは、作者の意図した設定ですから、口を挟む余地はありません。過去を素材にして、それをできるだけ忠実に再現するのか、時代は過去でも現代の感覚で扱い再現するのか―重要な観点だと思います。

ミキの母は、幼いミキを置いて家を出て10数年経っています。ミキと話すために映画館へきて、ミキを目の前にして話しかけようとしたとき、ミキの携帯が鳴り、母は映画館を去ります。後日手紙を託して、「会えう気があれば黄色いハンカチを掲げてほしい」と伝えます。劇の重要なポイントですが、実の母の心情ではなく、作者に操られている気がします。劇で、黄色いハンカチの効果を活かす、というモチーフが先行しているからではないかと思えます。

現代の感覚（ぼくの感覚というべきか）からすれば「対決」「激」がほしい気がします。例えば―

映画館で、母は娘に話しかける。母と知った娘は驚き、自分を捨てた母に反発、激高。母は切々と事情を語るが、娘は追いつかず。後日母は、「もう一度会ってほしい。その気になったら黄色いハンカチを掲げてほしい」と手紙を届ける。悩んだミキは数日後、一人で黄色いハンカチをつるそうとしている。それを見てみんなが協力する。その時初めて、黄色いハンカチは吊り下げられる。初めから吊り下げない方が効果的。

ぼくが「ひと昔前の」という印象を受けたのは、人物の「真の心情」より、「作意」「劇の筋書き」「ドラマの枠組み」が先行したところがあからだと思えます。

しかしこのことは、ぼくは、そう感じた、ということ、そうした方が、いいかどうかは別問題です。ベテランの大畑さんには、大畑さんの狙いと劇の創り方があり、その方がいい、という人も当然あるでしょう。

劇を楽しくする工夫も生きていました。映写技師の昭は、社長のアイデアで映画の宣伝のために、チャップリンになったり、いろいろな変装をして登場します。シェークスピア劇でいえば、「道化」です。劇には「緩急」「動静」がないと平板で退屈になります。声もよく通り、生き生きと演じておられました。

何故か劇の途中まで、中学生のミキは大人が演じているという先入観で観ていました。「この道を行く」を観劇した後だったのでマジックに罹っていたのでしょう。ミキは、声が澄んでいて、よく通るし、活舌もいいし、所作も初々しい。そのうち中学生だと分かり、この劇団がうらやましくなりました。映画館の使用人も存在感があり、味がありました。松井須磨子がいたから島村抱月の演劇が実現したように、優れたキャストがいれば、脚本家のイメージは広がり、魅力的な作品が誕生します。

メモから断片的な感想

- ・暗転の時間が思ったより多く、長かった。暗転を多用すれば劇を書くのは楽だが、舞台では劇がプツプツ切れ、観客の集中も切れる。暗転は少ない方がいい。音楽を使うとか、いろいろ工夫できる。
- ・照明の前明かりが強すぎて、顔が白くなって見えない場面が何回あった。
- ・ラストシーンでは、期待を込めて楽しそうに肩を組み、黄色いハンカチを見上げながら、緞帳が下りる。よかった、と感動する人もあると同時に、うまくまとめ過ぎ、と感じた人もあると思う。なんでも、始まりと終わりは難しい。

.....

以上、5本の演劇を観て、観劇記として文章にしました。太字にした箇所は、一個人の意見や考えではなく、一般的な共通の認識、劇創りの基本的な考えとして重要だと考えたからです。そこだけ拾い読みして考えてもらっても結構です。この観劇記は一つの視点の提供と思って読んでいただければ幸いです。(30180608 洲浜)